

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02608

研究課題名(和文) 描出話法および関連構文の研究

研究課題名(英文) The Syntax of Represented Speech and Its Related Constructions

研究代表者

廣江 顕 (HIROE, Akira)

長崎大学・言語教育研究センター・教授

研究者番号：20369119

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、描出話法文(represented speech sentence:RS)とその関連構文、とりわけ直接引用構文(direct quote sentence:DQ)を扱い、DQを基本的文法形式とし、RSはその文法拡張形式であるとの仮説を立て、英語と日本語で検証を行った。英語の場合、文法が許容する埋め込み文の形式は極めて限られている一方、日本語の場合は比較的自由であるという観察は、英語の場合には伝達部の語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure:LCS)、日本語の場合は引用マーカー「と」のLCSの構造的違いに還元できることを主張した。

研究成果の概要(英文)：In this research, based on the assumption that the two constructions-represented speech sentences (RSSs) and direct quote sentences (DQSs)-are interrelated with each other in a unified way, I argued that the grammatical form of RSSs is an extended grammatical one. Moreover, I argued that to what extent the two languages-English and Japanese can allow possible grammatical forms with regard to DQSs can be reduced to certain types of reporting verb in English and "to", a Japanese quote marker, in Japanese, respectively.

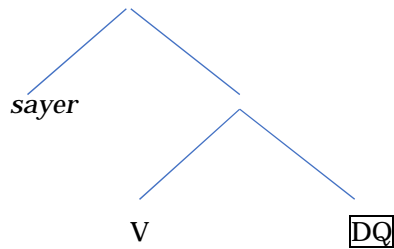
研究分野：英語学

キーワード：描出話法文 直接引用文 引用マーカー 付加部 語彙概念構造

### 1. 研究開始当初の背景

発話行為動詞(speech-act verb)を含む発話動詞一般の補文には、その統語的、意味的、語用論的特異性が観察されることが、生成文法の理論的研究という文脈でこれまで指摘されてきた。では、一見、伝達部(reporting clause)の発話動詞に選択されている、つまり、補文ように見える直接引用文(direct quote: DQ)が必ずしもそうではない。言い換えれば、付加部である例が発見されている点。

(1) a.



b. V [complement DQ ]

c. V [adjunct DQ ]

合成意味論(compositional semantics)という観点から捉えようとしても、必ずしも全体の意味が構成要素の総和としての解釈とは合致しない点。

(2) a. Mary said, "Dogs and cats are nice."

b. Mary said, "Cats and dogs are nice."

伝達部とは異なる発話の力(illocutionary force)が発話動詞補文一般にはマークされるという点。

(3) a. John asked, "Can I ask you something?"

b. Did Mary say, "Just do it on the double?"

以上の三つの点が、それぞれ異なったアプローチで解決を図る試みがなされてきた。

### 2. 研究の目的

発話動詞補文一般の統語的・意味的・語用論的特異性(idiosyncrasy)を、可能な限り原理的、統一的な仕方で捉えようと試みるのが本研究の第一義的目的であった。また、生成統語論における(最新の)文法モデルに照らし合わせて、統語部門、つまり、言語の計算体系(narrow syntax)を出発点としたモデルでどの程度発話動詞補文一般の特異性を理論的のみならず経験的にも捉えることができるかということも、本研究のもう一つの目的であった。

### 3. 研究の方法

発話動詞補文のなかでも「描出話法文(represented speech sentence: RSS)」とその基本的文法形式と考えられる「直接引用構文(direct quote sentence: DQS)」の二つを扱い、その二つの構文における被伝達部(reported clause)がどういったメカニズムで、またどういった統語的ステータスで埋め込まれてい

るかを明らかにし、その埋め込み形式を出発点とし、生成統語論の文法モデルに照らし合わせて、これまで観察された特異性が理論的にも経験的にもどの程度導くことが可能かを追求していくことで研究を遂行してきた。

また、一方で、DQを埋め込む際の引用マーカー(quote marker: QM)の有無による言語間の差異にも注目し、許容されるDQSを経験的な仕方で特定することでも研究を遂行した。

### 4. 研究成果

まず、直接引用構文(DQS)の文法特性から考察を始め、DQSに関する基本的事実、つまり、他動詞以外にもDQと共起する動詞を含む伝達部の例があること、名詞(句)が生起する位置に生起できない分布特性を有していること、DQからの要素の取り出しができず、その点が発話様態動詞(manner-of-speaking verb)のthat節と平行性があること、の三つの点から、DQSにおけるDQは補文ではなく付加部を構成していることを明らかにした。

その理論的帰結として、DQはCollins(1997)の主張とは異なり、格素性(Case feature)を持つ名詞表現の類ではないと主張した。さらに、DQSのDQは補文化辞(complementizer)を介さず、言わば「裸」で埋め込まれていることに注目し、その埋め込みを可能とする統語操作を「素埋め込み(bare-embedding:BE)」と呼び、BEが伝達部とは異なる発話の力を被伝達部、即ちDQにマークすることを可能とするメカニズムを提案した。

(4) Bare-embedding

is bare-embedded in iff can  
directly be embedded under a  
complementizer-less

BEによる埋め込みの結果、DQはTP(Tense phrase)として埋め込まれ、DQ独自の統語操作により、独自の発話の力を持つCPを投射することが可能となる。したがって、本研究の重要な理論的主張として、DQという、本来、独立文と考えられてきたものが、そうではないとした点が挙げられる。

本予備的考察のもう一つの成果として、DQの移動先(着地点)がCP(complementizer phrase)「補文化辞句」のSpec(specifier)「指定辞」の位置であることを主張した。この主張は、Collins(1997)で提案されている[+quote]というad hocな移動を駆動する素性を仮定したアプローチではなく、補文化辞を介さないという事実を捉えたアプローチで論証を行った点に意義がある。

次に、RSSを扱い、以下の三つの論点

RSSの分布特性

RSSの解釈、つまり、RSSがLF(論理形式)インターフェイスでどのように解釈されるか

RSSの文法特性を一般的な文法特性から

どの程度導くことが可能かから解明を図った。 に関しては、前年度までの本研究による知見に加えて、さらに経験的事実に関する研究範囲を拡大し、統語的な関係が一切無く、あるのは意味選択関係のみの文と文との関係においても RSS が可能であると指摘を行い、DQ と同様、RSS も付加部を構成しているとの結論に至った。

一方で、RSS に関する主要な文献にあたり、RSS 研究の中でも代表的な研究と言える、Giorgi (2017)が提案する以下の

RSS は伝達部の補文であり、補文よりも構造的に高い位置に規定生成されている。RSS の伝達部は、音韻的に挿入句を形成しており、KP(comma phrase)「コンマ句」という独自の構造を成している。

という二つの主張について、もし Giorgi が主張するように、RSS が補文ならば、構造格(structural Case)を有する名詞表現ということになり、名詞あるいは名詞句が生起可能な位置に現れることを予測するが、その予測は正しくない。また、単独の独立文としては現れないことも同様に予測するが、その予測もまた正しくない。こうした経験的事実とは相入れないことが Giorgi の提案に問題があると主張する根拠のまずひとつ。

もう一つは、補文の位置に生起してから話題化(topicalization)という統語操作により文頭の位置に移動すると、Giorgi はそう主張するものの、なぜ RSS が話題化されていると言えるのかということについてはその根拠が示されていない。したがって、Giorgi の主張には理論的・経験的瑕疵があることを、上記の二つを根拠として反論を行った。

さらに、Giorgi の主張への最も根本的な疑問として、RSS が補文の位置に基底生成されているのならば、根文(root sentence)として生起することがなぜできないのか説明できない。事実、主語・助動詞倒置(subject-aux inversion)、動詞句前置(VP-preposing)、否定倒置(negative inversion)、話題化といった根文が生起する。

- (2) a. (John thought to himself)  
Will I lend you my cell phone?  
b. (Tom said to himself) Has John bought a complete set of *The Closer* DVD boxes yet?  
c. (Sue thought to herself) Who did Mary use?  
d. (Flynn said to himself) CeAnn hoped for Nick to propose to her, and propose to her he did.  
e. (Kerry said to himself) Never in his life did Gabrielle see such a horrible crime scene.  
d. (The professor said to himself)  
This book, the students in this class should read.

三番目の成果として、DQ の類型論的考察を行った。英語だけでは見えてこない文法特

性を、例えば、チカソー語の事実を観察することで浮き彫りにする試みを行った(Munro (1981))。チカソー語では、目的語をマークする形態素が補文を選択する他動詞と共に現れるが、DQS の場合には現れない。

四番目の成果として、類型論的な考察を行うと、自然言語の中には DQS に QM が観察される、日本語や韓国語のような言語とそうでない言語の区別がある。本研究では、日本語の QM 「と」に注目した。英語と日本語の DQS に関する統語的振る舞いを比較すると、文法が許容する伝達部の種類の範囲に、英語と日本語では大きな違いがあることが分かった。

- (3) a. 「ただいま」と息子は階段を上ってきた。  
b. 「はいどうぞ」と彼女はテーブルについた。  
(4) a. 「一人にしてくれ」と叔父は私を下げさせた。  
b. 「やめてよ」と貴美子は逃げ出した。  
(5) a. \*"I'm home!" my son came up the stairs.  
b. \*"Here we are," she sat down at the table.  
(6) a. \*"Just leave me alone!" his uncle made me stand back.  
b. \*"Stop it!" Kimiko walked away.

この相違点を「と」のような QM がある場合、「と」の語彙概念構造(lexical conceptual structure: LCS)に関数 SAYING があり、その SAYING の項(argument)として DQ を選択していると考え、一方、QM のような語彙要素を持たない英語のような言語には、そのようなメカニズムは備わっていないと、概略、主張し、英語と日本語の可能な DQS の形式の違いを説明した(SS: Syntactic Structure「統語構造」)。

- (7) LCS of the Japanese quote marker *to* :  
SS : [adjunct DQ ] to V  
CS : [to WITH SAYING [complement DQ ]]

ただし、英語では、ある特定の限られた動詞群が伝達部となる場合は、本来、選択することができないDQ と共起するという事実がある。この事実については、日本語の QM 「と」がある場合とは異なり、その動詞群に属する動詞が DQ と共起する場合にのみ、当該動詞の LCS に関数 SAYING が付加されることにより、DQ を選択することが可能となるとの主張を行った。

- (8) LCS of the verb *laugh* :  
SS : [vp laugh [adjunct DQ]]  
LCS: [vp laugh WITH SAYING [compl. DQ ]]

以上の研究成果より、発話動詞補文一般が持つ統語的特異性が、統語論プロパーな問題ではなく、文中のどの要素の語彙概念構造が

関数 SAYING を持ちうるかという点に収束する。本研究では、伝達部(の動詞)とQMについてのみ考察の対象とした。語用論的特異性については、素埋め込みという統語操作の帰結として捉えることができるとの主張を行った。

残された問題点としては、英語の場合、なぜ特定の限られた動詞群の場合にのみ、その動詞の LCS に関数 SAYING が付加されるのかという点である。また日本語のような QM を持つ、例えば、韓国語にも同様の事実があるのか、今後の研究の課題としたい。

さらに、QM を含む節構造一般、また(日本語の場合)右側周辺部(right-periphery)の構造の解明も本研究では十分ではなかった。当該右側周辺部が二重の CP 構造をしているのかどうか、あるいは QM は投射しないそうなのか。この点もまたこれからの課題である。

こうした問題点以外にも、いくつか解決が図られなかった点がある。意味(解釈)上の特異性である。合成的意味論では捉えられない意味は如何にして LF インターフェイスでその外側から読み取るのかという問題が依然として課題として残っている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

廣江 顕、引用マーカー「と」の概念構造、JELS35、2018、42-47 (査読有)

廣江 顕、直接引用文の埋め込み構造、長崎大学言語教育研究センター論集第5号、2017、19-26 (査読有)

廣江 顕、描出話法の文法特性、日本英文学会第88回大会 Proceedings、2016、312-313 (査読有)

〔学会発表〕(計1件)

廣江 顕、引用マーカー「と」の概念構造、日本英語学会第35回大会、東北大学、平成29年11月18日・19日 (査読有)

〔図書〕(計1件)

廣江 顕・松元浩一・谷川晋一・稲田俊一郎・徐佩怜・水本豪・團迫雅彦・隈上麻衣・古村由美子・丸山真純・大橋絵里・大谷英里果・奥田阿子・小笠原真司、英宝社、『外国語の非 - 常識 - ことばの真実と謎を追い求めて - 』「分詞構文の非 - 常識」、2018、5-16 (査読有)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：

権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等 無し

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

廣江 顕 (HIROE, Akira)

長崎大学・言語教育研究センター・教授

研究者番号：20369119

##### (2) 研究分担者

無し

##### (3) 連携研究者

無し

##### (4) 研究協力者

無し